

#2 生命体としての家

建築研究所
主任研究員 水上 点晴

あっ、あれなんだろう。あんなとこに家ができた。
いいか。この森をうんと走って陸地測量部でこう
言うんだ。

「北緯25度東経5厘のところに、目的のわからない
大きな工事ができました」とな。

宮沢賢治「ありとこのこ」に、警戒に当たっていた
蟻の兵隊が、突如として現れた空に伸びる物体(後
からきのこと判明するのであるが)を、敵軍の構造
物だと勘違いして慌てる様子が記されている。セル
フビルドした我が家の壁をどうするか考えた時、な
るべく周囲の雑木林に溶け込むような意匠としたか
ったため、その場の土を削って、土壁とすることに
した。地面から壁がひと続きにつながることで、冒
頭の「きのこが生えたような家」をイメージとした。

見た目だけでなく、工期もきのこが生えるような
スピードで…と行けばよかったのだが、乾燥養生に
かかる時間もさることながら、人的資源と家づくりに
割く時間の制限から、完成までに15年の歳月を要
することになった。周囲はスピードがゆったりして
いた分、かえって時間と共に成長する、生命体のよ
うな家として感じられていたようである。年賀状で
定期報告していた知人からは、「毎年楽しみにして

ますよ」とか、親戚のおばちゃんよろしく、「ちょ
っと見ないうちにすっかり大きくなって・・・」と家
の完成を喜ぶ声が寄せられた。また「完成品もさる
ことながら途中経過が面白いのよ」との声に励まされ、
2025年6月、旭川にある本屋、子ども富貴堂に
て、「きのこのような家づくり展」と題して、家づ
くりの経過を展示した写真展を催した。

展示した写真をポストカードにして、来場者に気
に入った写真を1枚プレゼントしつつ、人気投票を
してみると、意外にも完成写真より途中経過を選
ぶ人が多くて驚いた。ふんどしを締めて四股を踏んだ
地鎮祭での、決意と不安がないまぜになった表情や、
土壁の下地となる木舞で家が透き通って見えるひと
夏の涼しげな小屋の写真は、完成してしまえば見え
なくなってしまうものである。最終的に見えなくな
る手順は、合理化の名のもとに省略されがちである
が、選んでくれた人はエールとして、形ではなく背
後に潜むエピソードこそが、家に奥行きを与えるこ
とを伝えてくれたように思う。

家を生命体と捉えられないか？それは家づくりに
おける1つのテーマであった。次の写真は、デンマ
ークのレス島にある、茅葺きならぬ海藻葺きの家だ
る。カセットテープのテープのように細長い海藻



写真1 地続きの洋館の壁



写真2 きのこのような家づくり展の様子



写真3 時間が経っておぼろげに木舞下地が浮かぶ土壁



写真4 レス島の海藻葺き

を束ねて、形づくられるその屋根によって、下の躯体がすっぽりと包み込まれている。その動物然とした佇まいを目にした時、今でも動き出さんばかりの、マンモスを見ているかのような不思議な感覚を覚える。見た目ばかりにあらず、雨が降れば、1本1本の海藻が水を含んで膨れ上がり、繊維の隙間を埋めることで雨漏りさせないというのである。同様に茅葺き屋根では、気体である煙は屋外に排出しても、液体である雨は屋内に漏らさない。これは機械的に開閉されるドーム球場とは異なり、浸透圧に応じて細胞膜内外の物質循環を自律制御する生物の働きと同じである。

その煙排出機能により、茅葺きは屋内で裸火を焚くことができるが、エネルギーの源である火を、内部に蔵することができるか否かは、家を生命体として捉える際の重要な要素と思われる。現代の家は、電線という生命維持装置に繋がれている点で、自律的な生命体とは捉えづらい。太陽光パネルを用いた、近年話題のオフグリッドならば・・・と思うが、これも内部に蔵すとは言えない。要は、エネルギーの自給のみにあらず、便利さと危うさを併せ持つ火を内包することに、生命体としての意味があると考ええる。近づきたい一方で恐怖心を覚える相手を、身の内に招き入れるという行為は、見ず知らずの他人においても起こることである。茅葺きでは、この二面性を持つ他者を内部に招き入れる懐の深さが、囲炉裏だけでなく縁側にも備わっていて、包みつつ開かれていることに気づかされる。

そこで我が家では、自作の暖炉と薪ストーブを家に組み込み、薪は敷地内の雑木林の手入れを兼ねた伐採で賄う、火のある暮らしを目指した。そのうち



写真5 オンドル形式の薪ストーブの施工

薪ストーブについては、煙突をすぐに屋外へと立ち上げるのではなく、床下に水平に配管して周りを土で埋めたオンドル形式として、熱を搾り取った上で大気に排出している。通常、煙突をすぐに立ち上げるのは、大気との圧力差を利用して煙を吸い上げるためである。この際、薪の燃焼で得られる熱の内、薪ストーブ本体から受け取れる分以外は、大気に捨ててしまうことになる。一方、煙突を横引きにして、煙突から多くの熱を得ようとする場合、燃焼室は熱が逃げないように断熱して、高温高压の燃焼ガスが、煙突内の煙を押し出すように設計する。自動車エンジンの原理、カルノーサイクルでは、圧力膨張をピストン運動に変えて取り出すが、こちらでは高温の煙の水平運搬に利用するイメージである。無駄な圧力損失が生まれないよう、焚き口から煙突口までの経路で断面積を調整しつつ、温度管理には、横引き配管の長さや土間の厚さを調節した。

他にも井戸水は、その土地の年間平均気温で、季節を問わず一定に維持されていることを知り、土壁内部の木舞上に張り巡らせた銅管に通水することで、壁面を用いて夏は放射冷却に、冬はパネルヒーターとして用いている。人体の皮下に張り巡らされている血管の模写であり、たとえ土壁内部の銅管表面で結露したとしても、吸放湿性に優れた土壁では問題にならない。またトイレの天井は、ひだ状の腸壁を模して、アーチ形に組んだ木舞から、土が鍾乳洞のように垂れ下がり、消臭効果の高い土壁の表面積を増やして脱臭効果を狙うなど、各所に人体を模



写真6 腸壁のようなトイレの天井

した意匠兼機能を取り入れている。

外壁には蛍壁を施した。水戸光圀が隠居していた西山荘を訪れた際、東日本大震災でひび割れた土壁の修復工事が行われていた。土壁のところどころに赤いシミが浮かびあがっているのが模様のように美しく、不思議に思って尋ねると、蛍壁というのだと教えてくれた。左官屋さんに自分でやってみたいと教えを乞うと、鉄粉を混ぜて塗ると、表面に出た鉄粉が空気に触れて酸化反応を起こし、赤く染まるのだと教えてくれた。混ぜる前にフライパンで醤油と煮ると錆びやすくなるとも。早速、実践して様子を伺っていると、けし粒ほどの小ささから始まり、時間を経るごとにゆっくりとシミが広がり、成長しているのが分かる。西山荘で見た500円玉強の大きさになるには、果てしない時間がかかりそうだが、牛歩の歩みだった我が家のアップデートを待つ友人の声のように、楽しみが長く続くのは喜ばしいことで

ある。

以上、生命体としての家をテーマに、細胞壁や血管、腸壁などの人体を模した機能を持つ家、エネルギーのみならず他者を内部に据えた家、時間と共に成長する家を目指した、我が家の事例を紹介した。最後にレオナルド・コーエンのAnthemにある歌詞を紹介したい。

Ring the bells that still can ring

さあ、あの錆びついた鐘を鳴らそう

Forget your perfect offering

完璧である必要はないのだ

There is a crack, a crack in everything

あちこちひびが入っていても

That's how the light gets in

ひびがなければ光は差し込まないのだから

ひびが希望の光の源であると説くこの歌詞に触れて、歳を経るごとに肌にできるシミやしわは、決して恥ずべきものではなく、これまでの人生を代弁するような愛すべき相棒であると感じられた。家も、時間を経るごとに変化していく過程が、美しくなりうることを、土壁に広がるシミを蛍壁と愛でる作法に感じ取れる。生命体としての家の目指すべき方向性、これに名前を付けようと、我が家をTwinkle Wrinkle Houseと命名した。Twinkleは「きらきらひかる〜♪」でお馴染みの星の瞬きを、Wrinkleは「しわ」という意味である。二面性を持つ火と同じように、輝きと退廃が同居する家を目指すという意思表示である。

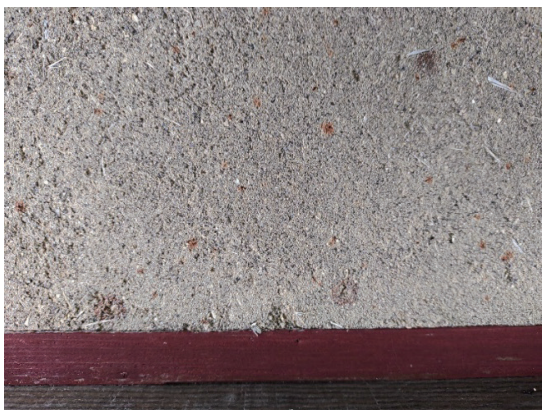


写真7 我が家の蛍壁と成長した姿（益子参考館の例）